

子どもにとって最適な環境とは

前広州日本人学校教諭

京都府立福知山高等学校附属中学校教諭 村岡 峻介

キーワード：非認知能力、お家の方の言葉かけ、包み込まれているという感覚

学校名：広州日本人学校

現地語表記 広州日本人外籍人員子女学校

児童生徒数：小学部 280 名、中学部 80 名(2023. 6. 14 現在)

1. 要旨

- ・ 小学部 6 年生から中学部 3 年生までを対象とした非認知能力アンケートの傾向として、6 年生は肯定的な解答をする児童が多く、中学部では、7 年生および 9 年生では肯定的な解答をする生徒が減少し、8 年生では増加傾向にある。
- ・ 中期（小学部 6 年生※～中学部 1 年生）と後期（中学部 2 年生～中学部 3 年生）の差に着目すると、周りの言葉かけについての回答（・学校の勉強をするのは、成績が下がると、怒られるからだ。・学校の勉強をするのは、まわりの人から、やりなさいといわれるからだ。・学校の勉強をするのは、やらないとまわりの人がうるさいからだ）について大きな差（中期と後期の差が約 48 ポイント）が見られた。
- ・ 勉強は好きですか？に対して、最も否定的な回答をした「1」の層について、やる気が上がった言葉かけは「ない」と答えた児童生徒のうち、やる気が下がった言葉かけの経験が「ある」と答えた児童生徒は約 90%であった。

※一般的には中期は小学校 5 年生からを指すが本調査に沿い、小学部 6 年生からの表記にしている。

2. 調査の動機

近年における教育において、高い認知能力が人生を豊かにし、さらには社会に適応するという図式を見直されてきている。そして、認知的ではない側面、いわゆる非認知能力がいかにより人生を豊かにするひとつの要因として注目されている。

日本国内でも、非認知能力についての研究が盛んになっており、2018 年 1 月に日本財団が発表した「家庭の経済格差と子どもの認知能力・非認知能力格差の関係分析-2.5 万人のビックデータから見えてきたもの-」では、大阪府箕面市の「子ども成長見守りシステム」より、就学期の子ども約 2.5 万人のデータを活用し、世帯の貧困が、子どもの学習達成や非認知能力にどのような影響を与えているのか分析している。分析の中で、家庭の経済状況が、学力だけでなく、非認知能力にも影響を与えることを明らかにしている。

こうした中で、広州日本人学校の児童生徒を見ていると、明るく穏やかに学校生活を送る児童生徒が多く、

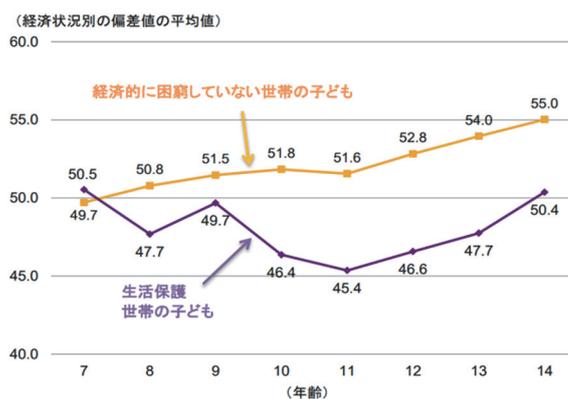


図1. 経済状況の偏差値の平均値と年齢の相関について
(日本財団「家庭：経済格差と子どもの認知能力・非認知能力格差の関係分析」より)

また筆者が接してきた生徒とは違う「よさ」がある。その「よさ」とは、「自ら挨拶ができる」という当たり前のことから、授業内における「明確に自分の思いを伝える力がある」など様々なことを挙げるができる。特に筆者が「よさ」と感じたのは、それぞれの生徒が「ありのまま」の姿で学校生活を送っている点である。日本国内で学級担任をしている際に、多くの生徒が「他者の目を気にして、自己をどのように表現すればよいか分からなくなる」姿をよく見てきた。この差異が何に起因しているのかを明らかにするため、非認知能力に関わるアンケートを起点として、分析することとした。

3. 調査結果

(1) 非認知能力アンケート

① アンケートについて

調査対象は、授業を担当していた小学部6年生～中学部3年生の児童生徒とした。アンケートは、MicrosoftのFormsで実施した。選択肢は、「当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「当てはまらない」にした。集計時には、「当てはまる」を「4点」、「当てはまらない」を「1点」として集計した。また、アンケート項目を30以内にすることで小学部および中学部の児童生徒が設問数による差が生じないように配慮した。

アンケート項目は、大きく4つの概念とした。以下に、その概念と質問例を示す。

- a. 能力に対する自己概念 例)・やりたくないことでも、一生懸命にやる。
- b. 学習全般に関する動機付け 例)・学校の勉強をするのは、自分のためになるからだ。
- c. 期待-価値理論 例)・学校の勉強は、ふだんの生活でも役立つと思う。
- d. メタ認知的方略 例)・勉強を始める前に、最初に計画を立ててから始める。

② アンケート結果について

結果から確認できた、大まかな傾向として、以下の2点が挙げられる。

- ・ 6年生は肯定的な解答をする児童が多い。
- ・ 中学部では、7年生および9年生では肯定的な解答をする生徒が減少し、8年生では増加傾向にある。

③ 小中一貫教育の視点でアンケート分析

小中一貫教育を初めて導入したのは広島県呉市であり、2000年度に、文部科学省から、研究開発学校の指定を受け、2小学校・1中学校、3校を統合した。導入のねらいは、義務教育9年間で修了するにふさわしい学力と社会性の育成、中1ギャップの解消、自尊感情の向上とされた。呉市の研究結果として、中期（第5～7学年）の重要性が示されており、その要因として、「急激な自尊感情の低下が見られる」、「学力形成上の特質として、前期（第1～4学年）では具体物を使う思考を扱い、後期（第8～9学年）では論理的な思考を扱い、その移行期にあたるのが中期である」が挙げられている。

本調査においても、小中一貫教育の知見をいかし、中期と後期の差が特に大きい項目を抽出することにした。抽出すると、特に差の大きい項目が3つあり、その全てが「学習全般に関する動機付け」の概念に関わる項目であった。質問項目は以下の3つである。

- 1 学校の勉強をするのは、成績が下がると、怒られるからだ。
- 2 学校の勉強をするのは、まわりの人から、やりなさいといわれるからだ。

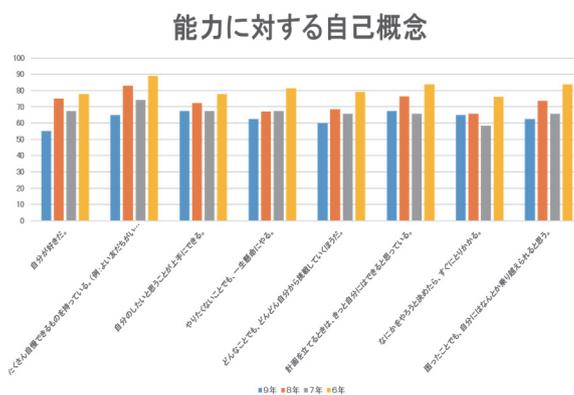


図2. アンケート結果の例

3 学校の勉強をするのは、やらないとまわりの人がうるさいからだ。

中期と後期の差の平均は、「約 19 pt」であるのに対し、該当する 3 つの項目の差の平均は、「約 48 pt」であることも、特に差が大きいことが伺える。

この結果と目の前にいる子どもたちの姿を照らし合わせると、次のようなことが見えてくる。在外にいる子どもたちの多くは、日本国内の高校へと進学する。日本人学校在籍時に、中学部 3 年生の担任をしたことから、お家の方の子どもへの期待の高さは、進路面談などで特に感じた。そのため、高校入試に対して特に意識の高い、日本人学校のお家の方は自然と「子どもへの言葉かけに変化が生じているのではないか」という仮説を立て、更にアンケート実施し、追調査した。

(2) 親から子への言葉かけに関するアンケート

① 子どもたちの取り巻く状況の変化

(2)のアンケートを実施するころ、新型コロナウイルス感染症に対する政策が大きく転換し、学校はオンライン授業形式となっていた。生活様式が一変したことや感染予防の観点から、子どもたちは一日のほとんどを在宅で過ごす生活となっており、お家の方の存在をこれまでよりも大きく感じる環境になっていた。

② アンケートについて

調査対象及び方法については、(1)のアンケートと同様とした。アンケート項目については、オンライン学習の状況についても把握したいという思いから、以下の 8 項目とした。

1. あなたは勉強が好きですか？

2. 1 を選んだ理由を教えてください。

3. オンライン学習になって、良かったことは？

4. オンライン学習になって、良くなかったことは？

5. オンライン学習になって、学校に通いたいなど 思ったことは何ですか？

6. お家の方の言葉かけで「勉強のやる気が上がった」と思う経験を教えてください。

7. お家の方の言葉かけで「勉強のやる気が下がった」と思う経験を教えてください。

8. 「お家の方ってすごいな」と思う経験を教えてください。

本調査では、下線部の 1 及び 6~8 の項目の分析について、結果と分析を進めていく。

③ アンケート項目「1. あなたは勉強が好きですか？」の結果及び分析について

はじめに、「あなたは勉強が好きですか？」の質問に対して、以下の結果となった。

・6 年生「2.9 pt」、(以下中学部) 1 年生「2.2 pt」、2 年生「2.0 pt」、3 年生「2.3 pt」

経年ではないので、単純比較はできないが、いわゆる移行期に起こる自尊感情の急激な変化と上記の結果が一致している。非認知教育の先行研究で示されている [1]、「学業成績が高いから自尊心が高い」という傾向とも一致する。【1】*Is there a causal relation between self-concept and academic achievement?* <Pottebaum et al. (1986)>

④ アンケート項目「1」と言葉かけ（「6」及び「7」のアンケート結果）の相関

子どもたちのアンケート結果から言葉かけの分類をすると、以下の 6 つに分類することができる。例に示しているのは、実際に子どもが回答した原文のまま示している。

- a. 将来系 例) ・それでは志望校に受からないよ。
 ・勉強すれば将来良い暮らしができるよ。
- b. 報酬—禁止系 例) ・〇時間勉強しないと、テレビ見るのは禁止するよ。
 ・テストでいい点とったら〇〇買ってあげる。
- c. 無関心 例) ・特になし

- d. 助言系 例)・辞書で調べれば見つかるよ。
- e. 動機付け系 例)・頑張ってるねと言ってくれた。
- f. 成績系 例)・成績が上がって褒められたとき。

この①～⑥の分類と「あなたは勉強が好きですか？」の結果を合わせたグラフを以下に示す。



図3. 中期（左図）と後期（右図）それぞれの「あなたは勉強が好きですか？」と言葉かけの関係

注目したいのが、中期2-1層である。この層は、「あなたは勉強が好きですか？」に対して、「やや当てはまらない」もしくは「当てはまらない」と回答した層である。中期の4-3層に比べて、約10%以上も高く、無関心に分類される回答をしている。さらに、中期の1層に注目すると、やる気が上がった言葉かけは「ない」と答えた児童生徒のうち、やる気の下がった言葉かけの経験が「ある」と答えた児童生徒は約90%であった。

これは、中期においての親の存在の大きさを物語っていると同時に、そもそも「言葉かけ」がないという状態の危うさを示唆している。

中期から後期の全体の傾向として、後期に移行すると「無関心」の割合が増加する。この理由の1つのヒントとして、Benesse 教育開発研究センターが実施した高校受験調査がある。この調査の中に、「あなたは、お子様の志望校を決めた時のことについて、次のようなことがどれくらいあてはまりますか」という設問の中で、親子関係についてもっとも多かった回答として、「子どもの意思を尊重して、自分の意見を主張するのをやめた」がある。まさに、この設問から「子どもの自立を温かく見守る保護者」の姿を感じることができた。

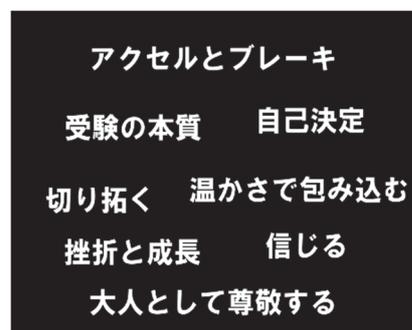


図4. 学級懇談会で示したスライドの一部

4. まとめ

「国内でも海外でも、同じように子育てに対する悩みは皆さんが持っていると思います。」

これは、ある保護者との会話の一端である。この会話は、中学3年生の担任として受け持つ生徒の「希望進路の実現」に向けて、さらに決意を固めるきっかけとなった。親も子どもも将来に対する「願い」は一緒である。それは、「幸せな将来を送りたい、送ってほしい」である。しかし、受験という競争を目の前にするとついつい周りの大人は「頑張れ!」と様々な形で言葉かけをしてしまう。しかし、子どもも様々な心模様で葛藤をしている。右図は、受験に向けての学級懇談会で筆者が作成したスライドの一部である。担任として、お家の方とともに子どもの「成長」そして「希望進路の実現」を願い、提示をした。「それぞれの家庭には、それぞれの教育がある」というのは、十二分に分かっているが、どのように、「教師」「保護者」「生徒」の歩調を合わすかが、「本人の成長」に大きく影響をするか。本調査の結果を振り返ると、改めてその大切さに気付かされた。

ここで、本調査の中で一番響いた生徒の回答を示したいと思う。

- ・ 家で過ごす時間が長くなり生活リズムが崩れ、運動不足なため体もダルくなっていたが、母や父が散歩に誘ってくれた。また成績のことで褒めてくれて、やる気が出た。もっと期待に応えたいと感じた。

理想の親子関係はないように思うが、支配的ではなく、自然体で保護者の期待に応えようとするこの回答に、1つの理想を感じる事ができた。また、京都府教育振興プランでは、子どもとその子どもを取り巻く環境から、子ども自身が「包み込まれているという感覚」を感じ取れることを理念として掲げている。1人の生徒に対して、「教師」「親」「地域」が適切に関わることで、生徒自身が期待に応えたいと自然に思う、その姿こそが「子どもにとっての最適な環境」の1つの答えであると改めて確信することができた。

日々の教育活動の中で、どのように「包み込まれているという感覚」を創り出すか。子どもを取り巻く全ての人とともに考えていきたい。

5. 謝辞

最後に、この調査に関わっていただいた全ての方に感謝を申し上げます。